



～九州北部豪雨からまもなく1年～

みずから守る防災・減災の取組

●問合せ先 協働推進課防災安全係 ☎72-2111 内線253

平成29年7月5日、九州北部で局地的に激しい雨が降り、九州地方で初の大雨特別警報が発表されました。朝倉市では、気象庁のレーダー解析で観測史上最大となる降水量を記録し、各地で甚大な被害が発生しました。

近年、大規模な災害が多発しており、小都市でもこのような災害が発生しても不思議ではありません。

これから梅雨(集中豪雨)や台風の接近が多い時期を迎えます。「みずからの命を守る」ため、家庭でできる災害への備えについて考えてみましょう。

日頃からの備え

災害はいつ発生するか分かりません。日頃から家族で話し合っておきましょう。

●避難場所・避難経路の確認

最寄の避難所や、避難所までの安全な避難経路を確認しておきましょう。災害の種類によって、開設する避難所が異なるので、事前に市ホームページやハザードマップで確認しておきましょう。

※ハザードマップは、協働推進課窓口(本館2階)、市ホームページから取得できます

●連絡手段の確認

災害発生時に、家族が一緒にいるとは限りません。また災害時は、電話がつながりにくくなり、連絡が取れない場合もあります。家族が集合する場所を事前に決めておき、災害時伝言ダイヤル(171)や災害用伝言板など、複数の連絡手段を確認しておきましょう。

●家の安全点検

大雨や台風に向けて、次のことを点検しておきましょう。

- ・雨どいや側溝を掃除し、排水をよくする
- ・風で飛ばされそうな物は、飛ばないように固定、または家の中に移動する
- ・飛散防止フィルムを貼る、雨戸を閉めるなどして窓を補強する
- ・断水に備えて、飲料水・生活用水を確保する

情報収集の手段

大雨による河川の増水や、台風の接近に伴い、危険が生じる恐れがあるときは、家の安全点検を行い、テレビやラジオ、インターネットなどで、最新の気象情報を収集しましょう。

市は、避難所の開設情報や災害情報を、防災行政無線や防災メールまもるくん、緊急速報メール、市ホームページ、市フェイスブックなど、複数の手段でお知らせします。

●防災メールまもるくん

気象情報や避難情報などの各種防災情報のほか、防犯情報を配信します。事前の登録が必要です。

防災メールまもるくんの登録はこちらから



●緊急速報メール(エリアメール)

小郡市内のドコモ、au、ソフトバンクの携帯電話に、避難勧告などの緊急性の高い災害情報を送信するシステムです。

登録は不要で、通信料は無料です。設定方法や対応機種は、各携帯電話会社にお問い合わせください。

避難のタイミング

避難に関する情報が発令されたら、早めの避難を心がけましょう。例年、逃げ遅れによる被害が多く発生しています。「自分だけは大丈夫」と過信せず、自ら情報収集を行い、余裕をもって避難しましょう。

避難情報が発令されたら、早めの避難行動を！

緊急度 低 高		
避難準備・高齢者等避難開始	避難勧告	避難指示(緊急)
・避難に時間を要する人と、その支援者が避難を開始 ・それ以外の人は避難準備	・速やかに避難開始 ・外が危険な場合は、屋内の高いところなど安全な場所に避難	・緊急に避難 ・外が危険な場合は、屋内の高いところなど安全な場所に避難

●非常持出品の準備

左の表を参考に、非常持出品を準備し、持ち運びやすいようリュックサックなどにまとめておきましょう。

水・食料	飲料水 (1人1日3リットル) 非常食 (缶詰、レトルト食品など、火や水を使わないで済むもの)
生活用品	懐中電灯、携帯ラジオ 救急医療品、衣類 タオル
貴重品	現金、預貯金通帳 本人確認書類

食糧備蓄のポイント

家庭で防災専用に食料を備蓄するのは大変だと感じる人も多いかと思います。普段購入している食料を「少し多めに買って備蓄しておく」、「消費したら補充する」というサイクルで、家庭内備蓄を身近なものにしましょう。



洪水時に避難するときのポイント

①はきものに注意

避難する際、はだしではケガをする恐れがあり、長靴では水が入って歩きにくくなります。ひもで締められる運動靴を選びましょう。

②水深に注意

水深が50センチを超えると、避難するのは危険です。水の流れが速いところでは、水深が20センチ程度でも歩けなくなることがあります。

③足元に注意

洪水時の避難は、濁った水で水面下の様子が分かりません。マンホールや側溝など、危険が潜んでいます。長い棒を杖代わりにして、足元の安全を確認しながら歩きましょう。

④はぐれないように注意

家族で避難するときは、はぐれないようにお互いの体をロープで結んでおきましょう。特に子どもからは目を離さないようにしましょう。

⑤垂直避難

避難所までの歩行が危険な状態となった場合は、無理して外に出るのではなく、家の2階など、少しでも高いところへ緊急的に避難しましょう。